

ダニエル書11章21-35節 「卑劣な者と賢明な者」

1A 反キリスト的勝利 21-22

2A 第一回遠征 23-28

1B 計略的戦い 23-27

2B 聖なる契約への敵対 28

3A 第二回遠征 29-35

1B 聖なる契約を捨てた者たち 29-31

2B 自分の神を知っている者たち 32-35

本文

今晚は、ダニエル書 11 章 21-35 節を学びます。私たちは前回、ダニエルに示された幻で、ギリシアの北の王と南の王の攻防の歴史を見ました。南の王である、エジプトのプトレマイオス朝と、北の王である、シリアのセレウコス朝の王たちの間の戦いです。南の王が強くなったり、北の王が強くなったり、その間に政略結婚をしたりし、複雑な絡み合いの中で戦いが何度となく起こってきました。というか、起こることをダニエルは預言し、それが事実、歴史の中で成就していきました。そして、その間にあるのがイスラエルです、「美しい国」と呼ばれます。ギリシアの戦いの中で、イスラエルが巻き込まれていくのです。

そして、10 章によれば、その背後にギリシアの君がいて、天における悪の勢力がイスラエルを攻撃するように仕向けるのですが、それに対して戦うのがミカエルしかないという、主の使いの言葉がありました。21 節から、その戦いが一層のこと激しくなります。

これら王たちの戦いにおいて、うぬぼれや欺きや背き、計略が多く出てきます。その中で現れるのが、アンティオコス四世、名前はエピファネスです。21 節から、「卑劣な者」として登場します。私たちがこれまでも、8 章の中で預言されたので見てきた人物です。南の王との戦いを、アンティオコス・エピファネスが行いました。その帰り道で、ユダヤ人に対する激しい敵意を向けるのです。

1A 反キリスト的勝利 21-22

²¹ 彼に代わって、一人の卑劣な者が起こる。彼には国の権威は与えられないが、不意にやって来て、巧みなことばを使って国を奪い取る。

アンティオコス・エピファネスの特徴を一言でいうならば「卑劣」です。彼には狡猾と打算と裏切り、そして権力への飽くなき欲求がありました。そして彼が権力を握る大きな特徴は「巧みなことば」です。口がうまかったのです。人を自分にひきつけながら、自分に権力を集める方法を取りました。

さらに、彼は「不意」にやって来たとあります。新共同訳では「平穩」と訳されています。軍事的衝突によって権力を握るのではなく、平和を装ってすばやく握ります。

この人物を見ると、後に来る反キリストがどのような人物なのかを見据えることができます。彼は、初めは何でもない人物です。7章を思い出してください、彼は十本の角の間に生える「小さな角」でした。けれどもすばやく権力を握ります。本来、その権力の座に着く資格がないのに、なぜか誰も彼をそこから引きずり降ろすことはできません。催眠術をかけるように演説によって人々を魅了します。けれども一度、権力を握ればすべて自分の支配の中で人々をまとめます。「自由」を約束しながら、これまでなく束縛します。平和を約束しながら、戦争がこれまでになく起こります。そのような卑劣な人物です。

そしてアンティオコス・エピファネスがギリシアの王の中で最も注目されているのは、彼がユダヤ人とその神に対して尋常ではない憎しみを抱くことです。究極の反ユダヤ主義者です。同じように、反キリストはユダヤ人だけにではなく、キリストを信じる者に対しても激しい憎しみを露にします。そして権威と呼ばれるすべてのものに対して、特に神に対してそしめるのです。

では具体的に21節がどのように成就したかを説明します。アンティオコス・エピファネスは、死んだセレウコス・フィロパトルの弟です。20節に出てくる「一人の人」です。アンティオコス大王の息子です。フィロパトルが死んだ時、その正統な後継者はフィロパトルの息子デメトリオス一世でした。しかしデメトリオスは、ローマに人質として拘束されていました。そしてまだ赤ん坊だったもう一人の息子がおり、彼もアンティオコスという名ですが、シリアにいました。

エピファネスは、この小さなアンティオコスの後見人を装いながらアンティオキアに来て、策謀によってそのままセレウコス朝の王座を獲得しました。そして赤ん坊のアンティオコス自身はアンドロニコスに殺されて、その後エピファネスがアンドロニコスを死刑にしました。けれども、エピファネス自身がこの陰謀を行なったと思われず、行なったと思われず。

²² 彼の前では、洪水のような軍勢も、契約の君主さえも一掃されて打ち砕かれる。

エジプトからの数々の軍勢に対して、エピファネスはどんどん勝利していきました。そして「契約の君主」とありますが、8章で説明したとおり、これは大祭司オニアス三世のことです。もう一度、その部分を読んでみましょう。「8:9-12 そのうちの一本の角から、もう一本の小さな角が生え出て、南と、東と、麗しい国に向かって、非常に大きくなっていった。10 それは大きくなって天の軍勢に達し、天の軍勢と星のいくつかを地に落として、これを踏みつけ、11 軍の長に並ぶほどになり、彼から常供のささげ物を取り上げた。こうして、その聖所の基はくつがえされた。12 背きの行いにより、軍勢は常供のささげ物とともにその角に引き渡された。その角は真理を地に投げ捨て、事を行

って成功した。」彼が殺されてから、イスラエルのギリシア化、ヘレニズム化が一気に進みます。

2A 第一回遠征 23-28

1B 計略的戦い 23-27

²³ 彼は同盟を組んだ後で欺き、少ない人数で勢力を増していく。²⁴ 彼は不意にその州の肥沃な地域に侵入し、彼の父たちも、父の父たちもしなかったことを行う。彼は、そのかすめ奪った物、分捕り物、財宝を、自分たちの間で分け合う。彼は計略をめぐらして要塞を攻めるが、それは、時が来るまでのことである。

23 節は、自分についている者が少ししかないのに、同盟によって勢力を得るということです。彼は巧妙に国々に対して、特にエジプトに対してこれを行ないました。時のエジプトの王は、プトレマイオス6世(フィロメトル)でした。彼はアンティオコス・エピファネスの甥です。アンティオコス大王の娘クレオパトラが生んだ息子です。クレオパトラについては、17 節に登場していました。彼女は政略結婚によって嫁ぎましたが、エジプト側についてしまったのです。そして、その息子フィロメトルですが、まだ幼少であったので後見人がいたのですが、エピファネスは、今度は自分がフィロメトルの後見人を装って、結局、彼を傀儡の王にして、アレキサンドリア以外の地域を掌握します。

そして、24 節、「その州の肥沃な地域」とはエジプトのことです。今説明したとおり、フィロメトルを梃子にしてエジプトを攻めます。そして彼には一つの癖があって、自分に追従する者たちに略奪した物を分け与えていました。それによってさらに彼を支持する者たちが増えていきました。こうして「要塞を攻める」、つまりエジプトにある重要な地点を押さえますが、「時が来るまで」神の時が来たらしめられる、ということです。29 節に二回目の遠征の時に、彼の野望は阻まれます。

²⁵ 彼は勢力と勇気を駆り立て、大軍勢を率いて南の王に立ち向かう。南の王も非常に強大大軍勢を率い、奮い立ってこれと戦うが、抵抗することができなくなる。南の王に対して計略をめぐらす者たちがいるからである。²⁶ 彼のごちそうにあずかる者たちが彼を滅ぼし、彼の軍勢は押し流され、多くの者が刺し殺されて倒れる。

エジプト人たちはエピファネスのもう一人の甥である、プトレマイオス8世(フィスコン)を王に立てました。フィロメトルがエピファネスの影響下にあるからです。それでエピファネスは、以前のように攻略や少ない者たちではなく、大規模な遠征を繰り広げました。ペルシウム(Pelsium)の戦いです。結果はエピファネスが勝ちました。「南の王に対して計略をめぐらす者たちがいるからである。」とありますね。エジプト王の側近らや軍の失態があります。エピファネスはフィロメトルをメンフィスに置きエジプトでの権力を再び掌握します。けれども表向きは、エジプトとの友好関係を演じます。そこで次の御言葉があります。

²⁷ この二人の王は、心で悪事を謀りながらも、一つの食卓に着いて、まやかしを言い合う。しかし、成功はしない。終わりは、まだ定めの時を待たなくてはならないからだ。

勝利者のエピファネスと敗北者フィスカンが共に一つの食卓について友好関係を装っていますが、腹心は全く違っていました。けれども、「終わりは、まだ定めの時を待たなくてはならないからだ」と御使いは付け加えています。神の時間制限内でのアンティオコス・エピファネスの行動なのだ、ということを強調しています。終わりが来たら彼は立てなくなる、ということです。

2B 聖なる契約への敵対 28

²⁸ 彼は多くの財宝を携えて自分の国に帰る。彼の心は聖なる契約に敵対して事を行い、彼は自分の国に帰って行く。

ここです。アンティオコス・エピファネスのユダヤ人迫害、神殿荒らしは、エジプト遠征の帰りに行われました。が始まりました。エルサレムを攻め、八千人を殺し、四万人の捕虜を連れ、四万人を奴隷として売りました。さらに、聖所の中に入って聖なる器具を持ち去りました。

3A 第二回遠征 29-35

1B 聖なる契約を捨てた者たち 29-31

²⁹ 定めの際に、彼は再び南へ攻めて行くが、この二度目は初めの時のようではない。³⁰ キティムの船が彼に立ち向かって来るので、彼は落胆して引き返し、聖なる契約にいきりたって事を行う。彼は帰って行って、その聖なる契約を捨てた者たちに心を向けるようになる。

大規模な遠征としては第二回目になります。アンティオコス・エピファネスの傀儡であったフィロメトルと、エジプト人たちが擁立したフィスカンが和解します。それで自分の艇子を失ったエピファネスが怒ってこのように遠征に来ました。

けれども、エジプトはローマに助けを求めます。エピファネスが、まだ自分の手中に入っていないアレキサンドリアに向かう途中で、ローマ海軍のポピリウス・ラエナスが彼に対峙し、彼の周りに縁を描きました。（「キティム」とはローマのことを指しています。）「この円から出る前に決断せよ。」と迫りました。それでエピファネスは引き下がざるを得なかったのですが、その腹いせに行なったのがこの大規模なユダヤ人迫害です。

彼だけがユダヤ人を強制的にギリシア化したわけではありません。そこに「聖なる契約を捨てた者たち」がいたので、彼らを重く取り立てることによって徹底的に行なうことができました。先に、エピファネスが殺した大祭司オニ阿斯三世の話をしました。彼は代わりに既に律法を捨てているヤソンを大祭司にしていました。そして、一回目の遠征の際に聖なる器具を奪った時は、大祭司メネラ

オス(Menelaus)が案内しています。このようにユダヤ人の間でも、神に従う忠実な者と反逆者に分かれるようになります。思うに、キリシタンへの大迫害の時にも起こりましたね。キリシタンの迫害の急先鋒には、転んだ、つまり棄教した元キリシタンが行っていたのです。

ところで、使徒の働きにおいて初代教会が、食事の配給においてなおざりにされていると感じた人たちが苦情を申し立てましたね。6章に書かれています。6:1 「そのころ、弟子の数が増えるにつれて、ギリシア語を使うユダヤ人たちから、ヘブル語を使うユダヤ人たちに対して苦情が出た。彼らのうちのやもめたちが、毎日の配給においてなおざりにされていたからである。」とあります。これはヘレニズム化したユダヤ人たちのことであり、このギリシア時代に起こった事に起因しています。同じユダヤ人でも、ギリシア文化の中にいた人と、ヘブル文化に居残った人々で分かれたのです。今のイスラエルと似ていますが、同じユダヤ人であっても、まったく異なる文化と社会を背負うようになりました。

³¹ 彼の軍隊は立ち上がり、砦である聖所を冒し、常供のささげ物を取り払い、荒らす忌まわしいものを据える。

ここでついに、「荒らす忌むべきもの」が出てきます。ここではアンティオコス・エピファネスが行なったことを指していますが、ダニエル書9章27節では終わりの日の反キリストが行なうことになっています。そして、イエス様がマタイ24章で、言及しておられます。反キリストは聖所の中に入り、我こそが神であると宣言し、そして偽預言者が彼の像を造り、その像が物を言うようにさせます。エピファネスはその型になることを行ないました。

彼の軍隊は礼拝者をことごとく刺し殺しました。そして祭壇の上で豚をささげ、その肉汁をそこらにばら撒きました。そしてゼウスの像を置きました。これが荒らす忌むべきものです。ユダヤ人は徹底的にギリシア化されました。毎月25日、アンティオコス・エピファネスの誕生日を祝うとして、このゼウス神を拝まなければいけませんでした。豚を強制的に食べさせられ、割礼を赤ん坊に授けた母親は、さらし者にされ高所から赤ん坊とともに突き落とされました。これらの詳しいことは、マカバイ記に記されています。

2B 自分の神を知っている者たち 32-35

³² 彼は、契約に対して不誠実にふるまう者たちを巧言をもって墮落させるが、自分の神を知る人たちは堅く立って事を行う。³³ 民の中の賢明な者たちは、多くの人を悟らせる。彼らは、一時は剣にかかり、火に焼かれ、捕らわれの身となり、かすめ奪われて倒れる。³⁴ 彼らが倒れるとき、彼らへの助けは少なく、彼らにくみする者には巧みなことばを使う者が多い。

ユダヤ人は真っ二つに分かれました。エピファネスの方針に積極的に従う者もいたし、また迫害

を恐れて従う者もいました。その中で堅く立って事を行なう人々もいたのです。その英雄はマカバイ家の人たちです。マカバイ家の祭司マタティアスがこの偽りの宗教を拒みました。その息子たちはエルサレムから離れて、そこからマカバイ家の反乱を起こしました。これに啓発されて多くのユダヤ人が神に立ち返り、抵抗を始めました。8章にあったように、息子の一人ユダが、オニアスが殺されてから2300日後に、神殿を清め、神に奉献したハヌカーを導きました。

そこでここには一部のユダヤ人が神に従い、そして多くの人々が悟り、それで彼らの多くが殺されます。「彼らへの助けは少なく」とあります。マカバイ家の人たちとその取り巻きは、本当に小さな集団でした。戦うのはあまりにも貧弱でした。けれども、その小さな者たちが、大きな軍隊に打ち勝っていきました。神を知り、堅く立っている者たちを通して、神は強い者、大きい者よりもさらに大きなことを行なわれます。ヘブル書11章には、信仰の英雄が出て来ますが、ギデオンがいます。彼は三百人で、13万5千人にミデヤン人を倒しました。バラクは、デボラの助けを借りて、鉄の戦車を持つシセラ軍と戦い打ち勝ちました。サムソンは、ろばの骨一本で千人のペリシテ人を打ち叩きました。そしてこう言っています。「11:34 弱い者なのに強くされ、戦いの勇士となり、他国の陣営を陥れました。」

そして、「彼らにくみする者」とあります。助けは少ないのですが、彼らを巧みなことばで隠していますが、心は彼らと同じという人々は多くいます。いわゆる、隠れ信者です。表向きは上手なことを言って、密かに神の律法に従う人々です。イエス様の時代では、ちょうどニコデモやアリマタヤのヨセフのような人です。

このように、試練が来る時に、神の民といえども、その流れに積極的に従っていく人々が一部に出てきます。そして、その時流に乗っていく人々が多数派になってきます。けれども、そこで堅く立つ人々が出てきます。その勇気によって、他の人びとも立ちあがります。また、立ち上がる人々にはそれほど人々が集まりません。表に出ると迫害があるからです。けれども、静かに、巧みに隠しながら従っていく者たちも起こされるのです。エステル記でも、迫害の恐怖がなくなり、自分をユダヤ人だと公言する人々が出てきましたね。迫害下では、隠していくのです。クリシタンの迫害史でもそうでした。隠れクリシタンがいました。また、私たちは終わりの日において、ますますそうになっていくでしょう。大きな反キリスト的な流れに対して、どれほど堅く立ってられるか？なのです。

それで、どのようにして「堅く立つ」ことができるのか？「自分の神を知る人たち」ということです。彼らの力は、神を知っているところから出ていました。預言者エレミヤが、神を知っているということの富と力について、こう語りました。「エレミヤ書 9:23-24 知恵ある者は自分の知恵を誇るな。力ある者は自分の力を誇るな。富ある者は自分の富を誇るな。24 誇る者は、ただ、これを誇れ。悟りを得て、わたしを知っていることを。わたしは【主】であり、地に恵みと公正と正義を行う者であるからだ。まことに、わたしはこれらのことを喜ぶ。——【主】のことば。』」私たちは、自分がどれだ

知っているのか、あるいは、どれだけ体力や知力を持っているのか、どれだけ財産があるのかということで、劣等感を抱いたりして心を揺るがせます。けれども、「悟りを得て、主を知っているということを誇りなさい」と言っています。主を知っているということそのものが、財産なのです。

ユダヤ人の話に戻るならば、終わりの日に、この神を知る人々は、残されたイスラエルの民です。反キリストと契約を結ぶ者が多くいる中で(ダニエル 9:27)、それでも神とメシアを求める残された民がおり、再臨の主を見て、悔い改め、御霊の新生を経験します。しかし、反逆者らはこの救いにあずかることなく、殺されます。

³⁵ 賢明な者たちのうちには倒れる者もあるが、それは終わりの時まで、彼らが錬られ、清められ、白くされるためである。それは、定めの時はまだ来ないからである。

当時、堅く立って行く中で、倒れていく者たちもいます。しかし、激しい迫害によって、練られ、清められ、白くされていきます。これまで多くが信仰的には眠っていたかもしれない人々が、かえって強められることがあります。悪に加担するような背教者が出て来る一方で、ますます清められる人々も出て来るということです。イエス様も、ご自身が戻って来られるのに、「黙示 22:11 不正を行う者には、ますます不正を行わせ、汚れた者は、ますます汚れた者とならせなさい。正しい者には、ますます正しいことを行わせ、聖なる者は、ますます聖なる者とならせなさい。」と言われました。

先ほど話したように、マカバイ家の人たちが立ち上がりました。マカバイ家の祭司マタティアが、ゼウス神にいけにえを捧げることを強制した人々を、あのピネハスがかつて行なったように剣で刺して殺しました。そしてマタティアが、五人の息子たちと共に山中に隠れると、セレウコス朝に対する敵意を募らせていたユダヤ人がそこに集まってきました。マタティアはこれを軍に組織し、次第に本格的な反乱となっていくます。マタティアの死後、息子ユダがセレウコス朝からの独立を目指す戦争を開始しました。自分たちは貧弱な武装しかしていなかったのですが、ちょうどサウルの息子ヨナタンのように、「主の御心ならば、数が少ない、多いは関係がない」と言って鼓舞し、勇猛に戦いました。それで、数々の戦いで相手側を撃破し、エルサレムを包囲して、相手の軍を要塞に封じ込めて、エルサレムに入城しました。そして、油を調合する八日間、その油がなくなることがなかったことをお祝いする、ハヌカーが始まっています。激しい迫害の中で、一人が主に立ち上がり、それに連なる者たちも起こされて、相変わらず迫害の手は止むことはありませんでしたが、秘かにユダたちに付いて行き、神を信じていました。こうやってユダヤ人の練り清め、霊的復興が起こったことをマカバイ記が記しています。

そして、これが「終わりの時にまで」とあるとおり、ギリシア時代の出来事が、エレミヤ書では「ヤコブにとっての苦難」で完成する出来事へとつながります。イエス様が、「マタ 24:21 そのときには、世の始まりから今に至るまでなかったような、また今後も決してないような、大きな苦難があるから

です。」と言われた大患難です。ふるい分けが、苦難の中でイスラエルの民に起こります。

私たちも、この終わりの日の流れの兆しを、ますます感じていくでしょう。清められる人は清められ、そうでない人たちはますます、そのことが明らかにされます。神を知り、しっかりと堅く立つことが本当に必要です。